

研究ノート

スペイン内戦期における男性のまなざし ——カトリック的倫理観による看護婦像——

渡 邊 千 秋*

はじめに

1931年4月の第二共和国(1931-1936年)の誕生により、スペインの社会は大きく変わった。女性が伝統的な価値観を超えて新たな可能性を模索しうる時代が訪れたのである。共和国期には、たとえば1932年の女性参政権獲得など、法律によって女性に新たな権利が保障された。¹⁾ また公的空間に女性が進出する可能性が増え、女性政治家も積極的な活動を行い、スペイン内戦下の共和国陣営では、なかには閣僚となって政策決定に大きく関与する者も出た。また前線へ出向く女性民兵も登場し、戦争が女性の社会的地位の再認と活動領域拡大を導いた。²⁾ しかし、反乱軍(フランコ陣営)側では、女性はあくまで銃後を守り戦いに出る男性を補助する存在とされ、それまでの伝統的な女性の役割から出ることはなかった。³⁾ カトリック的で伝統的な価値観は、内戦中のフランコ陣営を支える精神的支柱となった。スペインでは、ファシストの政党ファラン

* 青山学院大学国際政治経済学部准教授

- 1) その一方で、女性に参政権を認めたことにより、女性票が右派に流れ、保守勢力が再び台頭することを招いたとされる。
- 2) 研究の進展により、共和国陣営においても、実際は女性が前線に出ることを好まなかった男性も多かったことも判明している。
- 3) 女性の活動領域の変遷は、これまでの先行研究が既に明らかにしている。日本語で書かれたスペインにおける第二共和政期・内戦期のジェンダー史の総括として、砂山充子「第6章 戦争とジェンダー——スペイン内戦の場合」、姫岡とし子(et al.)『ジェンダー』ミネルヴァ書房、2008年、pp. 249-299を参照されたい。

へ党ですら、人々のあいだにあるカトリック的心性と妥協せざるをえなかった。たとえば、ピラルル・プリモ・デ・リベラに率いられたファランヘ党女性部門セクシオン・フェメニーナ（以下 SF と略記）は、女性の手による後方からの前線支援活動の指導・とりまとめ役を務めたが、その支援を円滑に行うためのシステムづくりに協力し、フランコ陣営を支援するのに大きな役割を果たしたのは、信仰の共同体であるカトリック教会が運営する平信徒のための組織、アクション・カトリカ婦人部（La Acción Católica de la Mujer: 以下「婦人部」と略記）⁴⁾であり、なかでも後で述べる若い未婚の女性の組織が中心となっていた。

本稿では、こういったカトリック的女性たちの活動を跡づけながらも、⁵⁾ これまで一括りにまとめて語られてきた男性的な視線・彼女たちに向けられた「まなざし」がもっていた規制の力を再考し、当時のカトリック的世界観の一端を省みる手がかりをつかみたいと考えるものである。

カトリック平信徒の女性は内戦下でどのような状況におかれたか？

ある「まなざし」を考えるにあたっては、まずそのまなざしが向けられる対象について知っておく必要がある。また平信徒の糾合をめざした組織に所属する女性が、内戦下のスペインでどのような生活を送っていたのかを知ることも非常に重要である、と思われる。というのも、1936年7月18日に軍部がクーデタを起こしてからは、自分たちの活動する地域が共和国軍の掌中にあるか、

4) 「婦人部」は未婚者・既婚者を合わせた女性層全体での連合体の名称。なお組織名中の“Mujer (女性)”を本稿では「婦人」と訳出する。

5) 「婦人部」の具体的な活動については、既に先行研究が詳細に論じている。以下の文献を参照されたい。María SALAS LARRAZÁBAL, *Las mujeres de la Acción Católica Española, 1919-1936*, Madrid, Ediciones de la ACE, 2003. Inmaculada BLASCO, *Paradojas de la ortodoxia. Política de masas y militancia católica femenina en España (1919-1939)*, Zaragoza, Prensas Universitarias de Zaragoza, 2003. María SALAS LARRAZÁBAL y Teresa RODRÍGUEZ DE LÁCEA, *Pilar Bellosillo: Nueva imagen de la mujer en la Iglesia*, Madrid, Ediciones de la ACE, 2004. Rebeca ARCE PINEDO, *Dios, Patria y Hogar. La construcción social de la mujer española por el catolicismo y las derechas en el primer tercio del siglo XX*, Santander, Universidad de Cantabria, 2008.

反乱軍の掌中にあるかで、その地域の女性平信徒の運命は大きく異なったからである。

一般に、第二共和国期からカトリック教会の社会的・政治的利益を守るという意識をもった「よきカトリック平信徒」であればあるほど、共和国の反教権的政策に反対する立場を表明する、という傾向にあった。この時期「信仰を実践する人間である」という人物評は「反共和国分子である」と解釈された。カトリック的な組織に属するということが自体がその人物を危険とみなす判断基準として機能したのである。特に、聖職者はその外見や態度から人目につきやすく、内戦開始直後から迫害の対象となった。実際、共和国陣営における聖職者殺害は残虐を極め、殺害された人数も6832名を数えるという。⁶⁾ また、加えて、聖職者ではない者、つまり平信徒の殺害も頻繁に起こった。平信徒が「キリスト教徒だったから殺害された」として彼らを単純に殉教者扱いする言説に与するのは危険であるが、殺す側の論理のひとつに、政治活動とならんで宗教実践の度合いが並べられていた事実を無視することもできない。

スペイン内戦下では、ローマ教皇の指導方針に従い宗教的实践を通じて信心深い「よき平信徒」を育成しようとしたアクション・カトリカのような組織は、⁷⁾ 共和国軍支配下の地域ではその活動を停止せざるをえなかった。アクション・カトリカは第二共和国期には共和国政権による世俗化に反対し、民衆の反教権主義に基づく暴力の行使から教会を守る活動に打って出ている。そして活発な活動が行われたため、皮肉にも、この時期に組織は拡大発展期をむかえたのだった。だからこそ、その後の内戦では、アクション・カトリカに所属する平信徒には、信仰実践に関しても教会利益の擁護という点に関しても徹底的であったことを理由に、共和国陣営関係者による追跡・脅迫・投獄・拷問・

6) 聖職者殺害については以下の文献を参照されたい。Antonio MONTERO MORENO, *Historia de la persecución religiosa en España, 1936-1939*, Madrid, BAC, 1961. 本書の出版は半世紀以上前であるが、情報・内容は現在にいたるまで有効である。1999年に再版された。なお、述べられている死者の内訳は在俗聖職者4184名・修道士2365名・修道女283名である。

7) 第二共和国期の1933年にスペインにおけるアクション・カトリカは男性部・青年部・婦人部・女子部の4部に再編された。

処刑といった危険がつきまってきたのである。

本稿で取り上げるアクション・カトリカ婦人部の若年層・未婚者が構成するアクション・カトリカ女子会 (La Juventud Femenina de Acción Católica: 以下「女子会」と略記) は、1923年にスペインの首都マドリード在住中間層の子女の市民的・カトリック的人格形成を目的として創設された。1927年にはバルセロナ、ビルバオ、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、サン・セバスティアンなどのマドリード以外の地方都市でも組織された。⁸⁾ その後1932年に「婦人部」内の自主的団体として部会別で承認され、1936年には会員70000名を数えた。第二共和国期には特にその反教権的宗教政策によって揺らいだカトリック教会を守る活動、つまりカトリックの世界観に基づく生活実践の擁護のための宣伝活動を集会等を通じて展開していった。この頃から、貧しい人々を救うという慈善活動を離れ、個人の人格形成と宗教的宣伝を旗印にした活動を積極的に繰り返したのである。⁹⁾

カトリック的組織に所属する平信徒で内戦下において殺害された人間の数は、女性よりも男性のほうが圧倒的に多い。ただし女性はその性別のおかげで連行や処刑を免れた、というわけでもなかった。実際のところ、共和国軍支配下にはいった地域では、「婦人部」の指導層は文字通り生命の危機にさらされたていた。¹⁰⁾ 「女子会」のメンバーでも尋問・投獄を受けた者や殺害された者もある。¹¹⁾

フランコ陣営における「女子会」の戦争協力活動

共和国軍支配下におかれた首都マドリードを避け、「女子会」の全国的統括組

8) BLASCO, op. cit., pp. 106-110.

9) BLASCO, op. cit., pp. 256-258.

10) 内戦で殺害された女子部のメンバーのなかには、既に教皇庁によって列福された者もある。2001年3月11日には教皇ヨハネ・パウロ2世によってバレンシアのアクション・カトリカ婦人部の19名が列福されたのはその一例である。

11) たとえば、首都マドリードではサン・ホセ教区センターの書記であったドロース・ファルキーナは、ファランヘ黨員であると解釈され、殺害された。César VIDAL, *Checas de Madrid. Las cárceles republicanas al descubrimiento*, Madrid, Debolsillo, 2006, p. 94.

織である中央評議会は反乱軍の参謀本部がおかれたブルゴスに移った。また一般に反乱軍側つまりフランコ陣営内での「女子会」は、黙想会や研究サークルを開催するなどしてメンバーの宗教的人格形成を行う実践活動を継続した。しかし生命が脅かされない地域にあって「女子会」が最も力を入れた活動は、前線にいる反乱軍兵士への具体的な支援であった。1937年に「女子会」中央評議会によって行われたアンケート調査によれば、反乱軍支配下の地域で共通して行われていたのは「セーターや手袋など、兵士むけの衣類材料確保・製作」「兵士への慰問品送付」¹²⁾、「野戦病院もしくは後方の病院における看護活動・戦傷病者慰問」「後方における教会建造物等を維持するための活動」など、陣営が戦闘を継続し宗教的心性を維持するよう支援するための一連の作業だった、ということがわかる。これらの活動は内戦開始直後から終結間際まで継続的に行われていた。実際、「女子会」が全体でどのくらいの規模の動員をおこなったかをまとめた記録はないが、個々の例を挙げるとすると、たとえばエプロ川という主要戦線を抱えるアラゴン地方の中心都市サラゴサの「女子会」は、「このところの数ヶ月間でメンバーは空き時間を活かして軍のために6000足の手袋を編んだ。」¹³⁾と報告している。またカナリア諸島サンタ・クルス・デ・ラ・パルマの「女子会」は、内戦勃発後初めての冬ごえの時期に、部全体をあげてキリスト者の義務を果たし、兵士に送るための編み物に励むよう、次のように呼びかけている。

12) このほか、戦争代母 (la madrina de guerra) と呼ばれる役割を担った女性は、戦地にいる兵士との文通や慰問品送付などをつうじて、彼らの気持ちを鼓舞したのだった。「女子会」の記録には「戦争代母」としては出ていないが、メンバーが個人でこの活動に関与していた可能性は極めて高い。スペインにおける戦争代母については以下の文献を参照されたい。Manuel de RAMÓN y Carmen ORTIZ, *Madrina de guerra. Cartas desde el frente*, Madrid, La Esfera de los Libros, 2003. なお日本のカトリック教会にも、スペイン内戦を戦う兵士の戦争代母となった若い女性平信徒がいた。この点に関しては渡邊千秋「日本のカトリック出版物にみるスペイン内戦報道」『青山国際政経論集』n.63, 2004年, p. 235.

13) *Sembrad. Publicación mensual de la Juventud Femenina de Acción Católica de Zaragoza*, n.11, marzo 1938, sin indicación del número de página.

「厳しい寒さにたえながら前線にいる気の毒な私たちの兵士・民兵のために働くことは、愛国主義者の義務であるとともにキリスト教者としての義務なのです。祖国と宗教がすべての息子・娘たちの協力を必要としている時なので、何人も、一時間たりとも無駄にはしてはいけません。サンタ・クルスのアクション・カトリカ婦人部・女子会センターは、既に以前にスペイン・ファランヘ党からうけとった毛糸で手袋と靴下を編んでいただきましたが、今度はマフラー作りに協力してくださる皆さんに材料をお渡しする予定です。」¹⁴⁾

この記述からは、冬用の衣類等、前線で戦う兵士が必要とするものを作成する活動の一端が「女子会」に求められていたこと、またこのような支援活動を取りまとめて統括を行ったのはファランヘ党 SF であったことがわかる。補給という行為のみに関していえば、ファランヘ党義勇兵部隊の補給網を背後に数える SF の果たす役割は大きかったであろう。しかし実際のニーズから、短期間で大量に手袋やマフラーなどを仕上げることが要求されるなか、20世紀初頭から長年にわたって社会的奉仕活動・慈善事業等の経験を蓄積した「女子会」の力を動員できたことは、当時誕生したばかりの SF が前線への支援活動を維持するにあたっての大きな支柱となったことであろう。¹⁵⁾

ここで注目すべきはこのファランヘ党 SF とアクション・カトリカ「婦人部」・「女子会」の協力関係は、フランコ陣営でファランヘ党を唯一の体制翼賛政党とすることを定めた統一令が1937年4月に出される以前に既に始まっていた、ということである。そうして、「婦人部」「女子会」は自らの実働力・動員力をみせ続けることにより、統一令発布後も「政治的な団体ではなく宗教的実践を目的とする団体である」と自らの非政治性を主張し、ファランヘ党の傘下に完全に組み込まれることに抵抗したのだった。それゆえ、「女子会」は、統

14) *Mi Parroquia*, n.27, Febrero-Marzo 1937, p. 12.

15) フランコ体制下でのカトリック教会の FS、特に FS が指導した社会扶助 (Auxilio Social) への協力に関しては以下の文献を参照されたい。ただしこの文献の論点は教会・聖職者ヒエラルキーと社会扶助との関わり限定されており、アクション・カトリカ「女子会」や「婦人部」と FS の関係性は具体的には論じられていない。Francisco GONZÁLEZ DE TENA, *El papel de la Iglesia en Auxilio Social*, Málaga, Sepha Ediciones, 2009.

一令発布後も自らのイニシアチブを維持した前線支援の活動を続けることができたのである。実際のところ、「女子会」が動員した実働労働力は大きかった。この実践力・行動力が全体主義的思考を強める党と宗教的色彩の強い団体との間のコンフリクトをひとまず棚上げにさせたのである。

「女子会」の活動が広く一般に知られていたことを示す事例として、一つの実例を挙げよう。たとえばグラナダでの「女子会」メンバーへの勤労奉仕の呼びかけは、アクション・カトリカ関連の機関誌ではなく、日刊紙『理想』の紙面に掲載された。

「アクション・カトリカ女子会メンバーの皆さん！ 今まさに、祖国があなたを必要としています。私たちの兵士のために何千ものベストを編まなくてはなりません、そのためにそれぞれが個人的な努力をするべきなのです。皆さん、働いてください！ 誰も怠けてはなりません！ 祖国が求めているのです、そしてあなたたちの、司教区連合からお願いします。スペイン万歳！ 連合長。」¹⁶⁾

またカラオラ・カルサダ司教区の「女子会」は政府から100キロの毛糸の支給を受け、セーターや手袋を編んだ。また同様に、軍管区司令部の直接の依頼で1936年12月には手袋や目だし帽を編んでいる。このように「女子会」は女性の役割と考えられた伝統的な家事労働の延長線上にある作業への協力を惜しまなかった。¹⁷⁾

ところで、内戦下の「女子会」の具体的な活動の展開内容・規模を規定したのは、会を取り巻く社会状況、いかえれば戦争の進行状況そのものであったことを忘れてはならない。1936年7月のクーデタ勃発直後から反乱軍の支配下にあった地域では、早期からフランコ陣営を支える原動力として女性の力が動員された。しかし共和国軍側の支配下にはいった地域では通常の宗教実践さえ

16) *Ideal*, n.1602, 5 octubre 1937, p. 10.

17) Archivo de la Acción Católica Española (Archivo ACE), caja 1, carpeta 1-2. "Actividades de la J.F. de A.C. de la Diócesis de Calahorra y la Calzada ha desarrollado desde el 3 de Agosto de 1936 hasta la fecha 8 de Marzo 1937", p. 3. なお、早くもフランコ陣営側を「政府」と認識している点に注目されたい。

地下活動として行わざるをえず、当然の結果として「女子会」の活動は停止していた。その後、地域が共和国軍支配下から反乱軍側の支配地域に組み込まれた折には、まず宗教的な活動を再開させることから始めるのが常であり、その後前述したような戦争推進のための協力活動が始まるまでにはある程度の時間がかかったといえる。

たとえばブルゴス司教区の「女子会」は、ファランヘ党 SF の示す方針への協力を惜しまず、その実践部隊として活動し、レストランが食事の量を減らして提供しつつ通常どおりの支払いを受け、その余剰を募金するという「唯一の皿」プログラムでの募金回収に協力するなど、¹⁸⁾ 銃後からの戦争協力体制づくりに積極的に関与したことがわかっている。しかし、たとえば 1937 年 2 月にフランコ陣営下にはいったマラガでは、「女子会」は年間報告書で自らの活動再開についてこう記録している。

「7か月にわたる赤の支配によって年鑑・記録カード・データなどがすべて失われた。栄光ある[フランコ陣営の]軍がマラガを解放してから一ヶ月後、アクシオン・カトリカ女子会は活動を再開した。マラガ司教区には 17 の教区センター（うち 9 つはマラガ市・8 つが他の町村のもの）があり、482 名が所属し、うち 183 名が記章をもつ正会員である。教区では月ごとに聖体拝領が行われ、司教区連合主催の黙想会・研究サークル・公教要理が開催された。また信仰実践と聖職者のための衣服支給などを行った。」¹⁹⁾

ここからうかがえるのは、「女子会」は通常の活動をとりもどすことを最重要課題としていたということ、そして会の本来的な宗教実践活動の再開と組織の精神的支柱となる聖職者の世話を第一義の事項とした、ということである。その後、メンバーが再結集しある程度の会の力の回復がみられた後に団体として後方支援活動への協力を行う、というのが通例であったようだ。

18) Archivo ACE, caja 1, carpeta 1-2. "Unión Diocesana de Juventud Femenina de A.C. de Burgos", p. 4.

19) Archivo ACE, caja 1, carpeta 1-2. "Diócesis de Málaga. Memoria del curso 1936-1937", p. 1.

「女子会」は、戦争という非常事態における贅沢や極端な娯楽を禁じ、カトリック的倫理観にしたがって女性が自らの人格形成を行うことによってこそ初めて祖国に奉仕できるという考えを打ち出していた。メンバーの総力を結集して内戦をフランコ陣営の勝利に導くこと、またその後に建設される新たな国家スペインで働き生きる自分たちを想定しているわけだが、待ち望む新国家はカトリック的なものになると考えて疑うことがない。

「祖国は再生し、生まれ変わるべきなのです、つまりそれは、女性が戦略を変えるべきだということです、なぜならば、何度も断言されているように、女性があるべき姿こそが社会のあるべき姿だからです。私たちが経験したあのような混沌とした国家に行きついてしまったら、悪の進歩に対して無関心のまま、私たちに襲いかかる雪崩に対してなにもせずに腕組みをしたままでは、責任の大部分は女性に、つまり人格形成を経て世の中で果たすべき自分の使命に目覚めるかわりに流行の洋服や非常識な行動や娯楽だけを考えている女子にある、といえるのではないのでしょうか？ 新生スペインで私たちにふさわしい場を立派に得るためにも、私たちは自分たちの義務をまっとうすることができるように、自分たちの人格形成に努めましょう。」²⁰⁾

こうして「女子会」はメンバーに対して、自己犠牲に基づく質素な生活と献身的な祖国への奉仕を求めた。しかしその浸透度については、徹底していたと一概にはいえないようだ。女子会に所属しながら看護婦として働いていた女性たちに対して男性がむけたまなざしが、それを物語っている。

「女子会」所属の看護婦に対する男性のまなざし

「女子会」の戦争協力活動のなかでも、メンバーが積極的に取り組み、かつ世間から類を抜いて注目されたのは戦傷病者の看護である。メンバーの中には病院で看護婦として働く者もあれば、入院している兵士を励ますための慰問を行う者もあった。たとえばアビラ司教区の「女子会」は、戦争開始直後からの会

20) *Sembrad. Publicación mensual de la Juventud Femenina de Acción Católica de Zaragoza*, n.10, enero-febrero 1938.

の活動をまとめ、

「戦争のなかで22名の私たちの姉妹がここにある2つの病院で看護婦として活動しています。また8名が週ごとに戦傷病者を慰問しています。」²¹⁾

と中央評議会に報告している。またそのほかの地域でも「女子会」は看護活動に積極的にかかわっており、状況を説明する具体的な報告記述も多く見受けられる。内戦勃発時の「女子会」全国会長マリア・デ・マダリアガは看護婦であり、²²⁾ 戦前はマドリッドにカトリック的な看護婦養成のためのセンターを作ろうと奔走した人物である。²³⁾ また内戦後に会長となるマリア・ゴンサレス・カステホンやカルメン・エンリケス・デ・サラマンカなども、内戦中は前線に近い病院で働いた経験をもつ。²⁴⁾

フランコ陣営における病院では、手術の補助・戦傷病者の世話などはもちろん床掃除にいたるまでの病院を維持する基本的な作業において女性の労働力に頼らざるをえなかった。「女子会」はそのニーズに答えようとしたのである。そして女子会を精神・道徳的に指導する立場の聖職者も、女子会のメンバーが看護婦として働くことを承認し、その活動を促進した。たとえば、内戦期に「婦人部」の顧問を務めたカシミロ・モルシーリョ・ゴンサレスは、

「キリスト教徒的で愛国的な命令に従って、アクシオン・カトリカ女子会は戦傷病者を優しく看護するのです。そうすることで自身は美徳の例を端的に示し、また本格的な慈愛のレッスンを学ぶのです。」²⁵⁾

21) Archivo ACE, caja 1, carpeta 1-2, “Juventud Femenina de Acción Católica de Ávila, curso 1936-1937”.

22) マダリアガは1905年マドリッドに生まれ、1920年代後半に「女子会」の中で頭角をあらわしはじめた。彼女の人物伝については以下のURLを参照されたい。<http://www.archimadrid.es/acatolica/sede/salas/madariaga.htm> (アクセス日2009年9月30日)

23) 現在でもスペイン南部アンダルシア地方のカディスにマダリアガの名前を冠した看護学校がある。この看護学校については以下のURLを参照されたい。<http://www.saluscadiz.org/> (アクセス日2009年9月30日)

24) BLASCO, op. cit., p. 297.

25) *Signo. Órgano de la Juventud de Acción Católica. Saludo a Franco: ¡Arriba España!*, n.9, julio 1937, p. 2. 統一令により「フランコ万歳、スペインよ立て!」のサブタイトルが機関誌名に挿入された。

と述べ、カトリックとしての義務感が愛国心を募らせるのであるから、熱意溢れる平信徒である「女子会」のメンバーが看護婦として奉仕することは当然であるし、またその奉仕活動から彼女らもキリスト教的な慈愛を学ぶことができるのだ、とする。

こういった女性の活動に対する積極的・肯定的な記録だけを読むと、私たちはいわゆる「白衣の天使」に思いをはせ、戦闘によって心身ともに深い傷をおった戦傷病者を看護して献身的に働く「女子会」メンバーを想像する。しかし実際にはこのような活動を行う女性に向けられる男性のまなざしは常に好意的なものとは限らなかった。

カトリック的な青年のなかには、スペインが内戦に至った原因自体を女性の社会進出と結び付ける者もいた。「墮落した」女性の存在そのものに大きな不信感を抱いているのである。たとえば、社会の世俗化を導いた悪の起源は女性にあるとしたガリシア地方ポンテベドラのアクション・カトリカ青年会の闘士、ヘスス・マリア・ムイニョス・ゴンサレスはこう記している。

「まったく恥ずかしいことだが正直のところ、現在の悪の起源の大部分は女性のせいだと告白しておかなくてはならない。スペイン的でキリスト教的な女性は、その気高さの最も輝かしいところを恥じて、映画スターやユダヤ的フリーメーソンの労働者が体現するようなパリ風・ニューヨーク風の方式・要素を受け入れ、スペイン的ではなくなろうとした。スペインの女性は純潔な心と聖なる精神の持ち主であるが、革命の秘密勢力がメッキのお盆にのせてスペイン女性に差し出した男のようで下品な様式のために、真の伝説的な優雅さを軽々しく扱ったのだった。」²⁶⁾

ただしこのように述べたあと、戦争遂行のために女性が果たす役割に言及している。女性はいまや神と祖国のためにさまざまな場所で働き、貢献しており、内戦という非常事態が女性を元の姿に戻したのだ、と続けて主張する。

26) Jesús María MUIÑOZ GONZÁLEZ, "La mujer y la paz", *Spes. Revista Mensual. Órgano de la Juventud Masculina de A.C. de Pontevedra*, n.38, febrero 1938, p. 6.

「しかし今やスペインの女性は、また再び真のスペイン女性となり、過ちと罪からたちかえって、今や、平和を勝ち取るのに全力を傾ける用意がある、スペインの男性と同じように——彼らの多くも神とスペインに対する罪からたちかえってきたのだが——そうして戦争に勝利していくのだ。今やスペインの女性は化粧もせず、スキャンダルを引き起こす外国風の洋服も身につけず、戦傷病者の世話をして病院で過ごし、社会扶助の食堂で革命の生存者の世話をしたり、孤児院で戦争孤児の面倒を見たり、勇気ある者の命を取り戻す薬を準備して研究所で働いたり、兵士の身繕いのための衣類やオーバーコートを縫っていたりするのを見かけるし、特にスペイン女性が正しい感覚の生活に戻ったのがわかる、そして自分自身の行動への責任感を持ち、美德とともに平和を得て、またその平和を聖なるものとともに管理するという危険をとまなうが根本的な使命を果たすことのなかに、確固たる勝利への保障としての神と祖国とを見出し、それを心の奥底に秘めているのだ。」²⁷⁾

ここでは与えられた一連の仕事を黙々とこなす女性をたたえる様子が見受けられる。神と祖国のための戦争において、女性はやっとあるべき姿を取り戻したとし、戦争を遂行するための日常の活動に女性が大きな役割を果たしていることを再認識し、またそれを積極的に受け入れている。

男性平信徒から男性兵士にむけられた、兵士自身の意識の低さに由来する道徳的な揺らぎへの戒めもみられる。アクション・カトリカの機関誌の1つである『しるし (*Signo*)』は、兵士にとっては前線で戦っているときよりも、後衛にまわったときのほうが誘惑が多く危険であるとする。

「ここ [後衛] につくやいなや、すべてが君の道徳的な要塞を取り崩しにかかる。もうわかっていただろうに。経験したことがあるだろう。今まで行ったこともないような後衛の町につく。おそらく二度と訪れることもないだろう町だ。君を知る人は誰もいない。そこで君は考える『ここで僕がなにをしようと、誰にもわからないさ。』」²⁸⁾

27) Ibid.

28) Tu amigo, "Hay dos guerras.", *Signo. Órgano de la Juventud de Acción Católica*, n.17, 23 enero 1938, p. 1.

そしてこの論考は、年長の男性がスサナという女性に性的な行為を求めて言い寄ると、スサナは「だれが見ていなくとも神さまが見ていらっしやる」と戒めたとし、次のような兵士全体への呼びかけでこのエピソードを終えている。

「神は君を助けようとして君のことを見ていらっしやる、それはいつものことだ、しかし君が望むなら、君のことを罰することもできるのが神だ。」²⁹⁾

ここでは、男性の身体的・生理的欲求不満が問題の発端であるという考えに基づいた、男性による男性に対する戒めの意識が作用しているといえよう。一方で、スサナの言動に体现されるように、女性はカトリック的道德観に従う正しい人として描かれている。

ただし男性の平信徒が不信感と共に、そして時には尊敬や憧憬の念をもって描写する女性像は、聖職者が描く女性の姿とは異なるものである。次にみるように、聖職者は女性が兵士を惑わす者ではないかと疑念を抱き、強い非難の目でみてもいる。既に内戦開始以前から、聖職者は女性の服装や生活習慣の乱れに対して厳格な道徳的コントロールの目を向けていた。この文脈でいえば病院で働く看護婦に対しても道徳心向上への喚起が行われていたのは想像に難くない。しかし、既に見たように、平信徒が第二共和国期の風紀の乱れを改心して生きる女性を内戦下で見いだしその存在を肯定的に評価しているのに対して、聖職者は看護婦としての戦争支援活動を行う女性すらも、男性を挑発する肉体をもつ存在だとして警鐘をならし続けているのだ。³⁰⁾

ではこのような聖職者の発言の一例を見てみよう。バスク地方ビトリアのサン・ミゲル・アンヘル教区での「女子会」顧問だったエミリオ・エシソはアクション・カトリカに所属しながら赤十字で働く看護婦を読者として想定し、『アクション・カトリカの看護婦』³¹⁾ というパンフレットを書いた。そこで述べら

29) Ibid.

30) カトリック教会が示す性道徳については以下を参照されたい。ウタ・ランケーハイネマン『カトリック教会と性の歴史』三交社、1995年。

31) Emilio ENCISO, *La enfermera de Acción Católica*, Vitoria, Editorial Social Católica. 発行年の記述はないが、バスク地方の戦況やパンフレットの内容から、内戦下、1937年8月以降に発行されたものと推定される。

れているのは「女子会」の看護婦が日ごろ実践すべき道德修養である。女子会という選ばれた組織のメンバーであることを忘れずに、手術室や当直室で、高い志をもって医師や病人、将校や兵士と関わるようにと諭す。病院で働くのは神のためであり、神が国を愛するように求めているから行くべきなのだ、とする。他の人の真似をして行くのでも、虚栄のために行くのでもなく、ましてや恋人を見つけるためでもなく、祖国スペインのために出向くように勧めている。そして戦争にあって女性は男性を誘惑するエバになってはならず、救いのマリアのようになるべきであるとしている。³²⁾

「戦傷病者は、一般的に、多少の差はあれども、無名の英雄なのだ。祖国の呼びかけに答え、その防衛に自分の命をさしだしたのだ。敵の機関銃が身体を破壊し、そのために病院のベッドに横になっている。全ての傷からくる痛みと悲しみがそこにある。わかるかね？ そんな状況にあれば、あなたが自分のペルソナにだけ気をとられ、自分の虚栄心を満足させるために時間を浪費し、特に化粧や衣装に気を遣って、戦傷病者の痛みを理解しようとしないうような人だったら、どんな印象を彼に与えることになると思うかね？ (…）あなたの虚栄心が彼の悲しみに対する無分別なからかいに思えたり、破廉恥なものに思えたりするのではないだろうか？ 看護婦の真っ赤に塗られた唇は痛みへのいやみな嘲笑なのだ。兵士が苦んでいてもなんとも思わない、という証拠でもある。自分がうぬぼれていられれば、看護婦にとっては軍隊全体が怪我を負おうが死のうがどうでもいいというのか。」³³⁾

その上で看護婦としての献身的な自己犠牲を強いて、次のようにも述べる。

「義務を果たしたければ、いったいあなたはどれほど自分を犠牲にしなればならないことか！ もっと面白いことがあって、病院に行きたくない日もあるだろう。けれど、それでも出向かなくてはならないのだ。また

32) 前掲書 8 ページにあるエバとマリアへの直接的言及は以下の通り。「エバは神によって授かった美しい性質を男性が自分の方へ来るようにするために使い、男性を神のほうへ向かわせるためには使わなかった。マリアは魅力的な美しさを男性が神へむかうようにするためだけに使ったのだ。」

33) Ibid., p. 11.

あまりオープンな性格ではない、もしかするとあなたが嫌悪感を抱いてしまう戦傷病者が割り当てられる日もあるだろう。しかしそれでもあなたは彼らの世話をし、親切にしないではいけません。また楽しい会話の最中に、注射をしたり、薬を飲ませたりしなければならぬときだってある。そんな時は、話すのをやめる以外に手はないのだ。もしかすると、別の処置室にはもっとあなたが興味を惹かれる誰かがいるかもしれない。けれどその人のところにあなたは行ってはいけません。おそらく、これがあなたの周辺にある危険だ。その危険に陥ってはならないし、ほんの少しだとしても陥っている場合ではないのだ。自分の義務を果たすことを知っている人間には、嫉妬から悪口が向けられることもある。また誰かの「無意識」が軽はずみな行動を起こさせ、そのおかげであなたの仕事場からあなたを引っ張り出そうとしても、あなたはそこにいかなければならないのだ。信仰生活もしくは家での義務と病院での義務とを両立させるためには、犠牲を払わなくてはならない。あなたの使命は喜びのうちにはない。そうではないのだ。よく犠牲を払いなさい。もしも自己犠牲の精神を持ち合わせていなければ、その結果として戦傷病者が苦しんでしまうのだから。』³⁴⁾

その上で、たとえさまざまな犠牲を強いられたとしても、看護婦として働く女性は純潔でなくてはならない、とする。

「純潔とは女性のもつ最も素晴らしい装飾品である。女性を分別ある人間の目に美しく写す美德はこれ以外にないのだよ。不純な男性はヒキガエルだが、不純な女性というのはもっと地位が低く、呼び名をも持たない。純潔をおびやかす危険はどこにもあるし、あなた自身、病院でそれを見出すにちがいない。戦傷病者の世話をしたり手術の助手を務めたり手当てをしたりしているとき、あなたが精神的高みにいるように自分で気をつけなければ、そして自分の心と感情をしっかりと見張り、聖なるものではないいかなる動きにも、またあまり威厳があるとはいえないどのような思考にも妥協することなく、禁欲のために犠牲を払う精神がなければ、また神さまの助けを願わなければ、あなたの純潔にとっての障害になりうるのだ。純潔でいなさい。あなたの魂が看護婦の制服のようにずっ

34) Ibid., p. 13.

と純白でありますように。常に純潔でありなさい。不純の危機にあってもそれに引き寄せられずにいなさい。あなたの通った後に真っ白な航跡を残していきなさい。あなたのお母さんであるマリアにも人生で起こったことなのだから。常に純潔な無原罪のマリアにも。』³⁵⁾

最後には、看護婦である「女子会」のメンバーに対して、キリスト教者としての模範をしめし、行動で戦傷病者をキリストに立ち返らせるよう諭した次のくだりがある。

「あなたがアクション・カトリカのメンバーだということを忘れないようにしなさい。特に病院にいるときは、自分の行動をそれにふさわしい場で差し出しているのだから。とはいっても、説教師になれといっているわけではないのだ。そうではなく、魂を神へと向けるせっかくの機会を活かしてほしいといっているのだよ。キリスト者としての模範をみせなさい。あなたの模範例はあなたの発することばよりもずっと働きがあることだろう。戦傷病者との会話には無知や悲惨さを見出すことだろう。傷に手を置いて、神への欲求を外へと導きだし、暗闇の中に光を作り出さなさい。適切なフレーズ、ぴったりの助言、よく考えられた説明、よく続く会話…いったいいくつのことをすることができるだろう！ 戦傷病者に護教的なパンフレットや、カトリック的宣教のビラ、宗教的雑誌や信仰を導くような本を渡しなさい。あなたは主任司祭のよき協力者でなければならぬ、彼の連絡係であり、偏見がなくなるように地をならすものでなくてはならぬ。あなたはアクション・カトリカのメンバーなのだ、つまり、使徒なのだよ。それを忘れてはならない。』³⁶⁾

「女子会」のメンバーは、戦傷病者を世話することは彼らを神へと導く崇高な任務を行うことと同義と理解してしかるべきだった。しかし現実には、看護婦も戦傷病者も人間的で感情的な部分をもっていた。聖戦思想に酔った聖職者からすれば、神と祖国をかけた宗教的規範に基づく聖なる戦いの最中には、世俗的な男女間の恋愛が入り込む余地はないはずであった。しかし度重なる聖職者の注意喚起は、現実には聖職者が望むような禁欲的なものではなかったことの表

35) Ibid., p. 12.

36) Ibid., p. 15.

れではないかとも思える。入院している男性兵士に対して、現状に対する対処を求める聖職者の声がこれを裏付けることだろう。たとえば、『塹壕におけるキリスト』という前線にある兵士向けのパンフレットでは、反乱軍側になつて戦地に赴いた青年兵士に対して自らの身体的欲望を抑制するよう強い戒めが説かれている。³⁷⁾

「31番。あなたたちが明らかに正直に自分の身体の使い方を理解しているように願っている。[32番]。隣人の妻を望んではならない。33番。悪い欲望を持って女性を見る者は、心の中で姦淫したのと同じことだ。34番。誘惑されてはならない。悪い会話はよい習慣を壊すものだ。」³⁸⁾

また内戦中ずっと、聖職者は女子会をはじめとする教会関連組織に属する看護婦を指導し続けた。たとえば、1937年夏のグラナダでは、看護婦全般を対象として神学校の副校長が座長をつとめる講座が開かれている。テーマは「看護実践において看護婦が直面する危険」と「日々厳しく自分の行動を省みること」によって、これらの危険に対して備える必要性」という二つが定められている。その上で、ここでいう看護婦が直面する危険とは、細かく分けると以下の点にまとめられる、としている。

「看護活動に奉仕しすぎてそのほかの義務を怠ってしまう暴走」「人間の尊重について、というのも看護婦たるものは常に他人の存在あってこそ自分の美しいすべての働きを実践するからである」「異なる性の人をどう扱えばよいか」「謙遜、習慣とすべき分別、状況、雰囲気について」「持って生まれた才能、教育、社会層などによって病人に差異を認めながら彼らを受け入れることについて」³⁹⁾

37) なおこのパンフレットに関しては、内戦中「多くの殉教者たちがこの本を使って瞑想した」としながら、戦争に関する記述を削除・改編し、黙想や祈祷書の友として使用できるよう、1940年代に改訂版がでている。改訂版については、以下を参照されたい。Pablo XAVIER, *Oremos. Manual de espíritu para los jóvenes*, Madrid, Ediciones Juventud de Acción Católica, sin fecha de publicación.

38) Karl STÁHLI, *Cristo en las trincheras*, Bilbao, Editorial Vizcaina, 1938, pp. 77-78.

39) “Cursillo de Moral para enfermeras”, *Ideal*, n.1525, 7 julio 1937, p. 9.

この数行のうちには、看護婦には道徳的墮落が起ると仮定し、それを未然に防ごうとする聖職者の思惑がみえかくれする。そこには、彼女たちの奉仕の精神をうまく使えなければ、戦争に負けるだろう、彼女たちの行い次第で、負傷した兵士の士気はあがりも下がりもするのだ、という理解があったのだった。負傷した兵士を再び戦場へ送り出すことこそが、看護婦たちに課せられた使命であり、「女子会」に所属する看護婦たるものはその使命を果たして当然、と考えられていたのであった。

女性が女性の「墮落」を非難・攻撃することも多々あったようだ。「女子会」の記録の中にも、病院におけるメンバーの活動について、彼女らの道徳面での乱れに言及した、「残念ながらまだ望むべきものが多い」⁴⁰⁾等の記述が随所にみられる。つまり「女子会」の看護婦は外からのまなざしのみならず、内なるまなざしにもさらされ、そこから規制を受けていたといえよう。内戦期には「女子会」全国会長マダリアガは看護婦の道徳・人格形成を目指して設置された病院監察員に任命されているのだが、⁴¹⁾この人事に象徴されるように、「女子会」の指導層は、社会を再キリスト教化する国家のシステムの中に組み込まれながら、聖職者の示す方向性に従って、「普通の」メンバーであり看護婦である女性に対する道徳的なコントロールを行なっていったのである。

おわりに

戦争という非常事態にあって、フランコ陣営内でも女性の力が必要とされ、女性の活動の場は一時的に家庭から外の世界へと移った。しかしその活動内容は、兵士を支援しつつ後方の生活を守るためのものがほとんどで、従来女性の仕事とされていたものに限定された。⁴²⁾「女子会」は、共和国陣営によるカトリック教会に対する「迫害」や高位聖職者の多くがフランコ陣営を支持した事

40) Archivo ACE, caja 1, carpeta 1-2, "Actividades de la J.F. de A.C. de la Diócesis de Calahorra y la Calzada ha desarrollado desde el 3 de Agosto de 1936 hasta la fecha 8 de Marzo 1937", p. 4.

41) BLASCO, op. cit., p. 298.

42) 砂山, 前掲書, p. 289.

実を前に、フランコ陣営のための後方からの戦争支援活動にまわった。看護婦としても慰問者としても、「女子会」のメンバーは積極的な協力を行ったのだ。その中には、純粋に「白衣の天使」のイメージに合致した働きをした人々もいた。しかしながら、聖職者の口から漏れる度重なる看護婦の道徳心向上を求めることば、特に彼女たちの身体と精神の自己管理が必要だとする主張からは、聖職者が、負傷した兵士を惑わせ、軍の風紀・規律を乱す存在として女性を恐れていたことを読み取ることができよう。⁴³⁾ このような「まなごし」を受けて、女性たちが、理想とされた看護婦・慰問者像と自分との間の差に気付き、自らを再発見したとすれば、そこにはカトリック教の宗教的権威が示した道徳観に従い献身的に働く女性像とは異なる、ある意味したたかな女性の姿を見出すことができるだろう。その一方で、全てが聖職者の妄想・杞憂であったという読みも可能かもしれない。

ともかくも、聖職者たちが内戦中に提示したカトリック的な倫理観に基づく献身的な女性像が、フランコ体制下で女性を統制するために使用されたのは事実である。しかし、1940年代・50年代の「婦人部」・「女子会」の活動状況や、その後の時代の民主化へむかう下地づくりを担ったカトリック的女性の存在を考えると、彼女らが単に周囲の男性や教会の権威に従属するだけの存在だったとは考えにくい。むしろ文化的ヘゲモニーを獲得するために交渉を重ねながら行動する彼女らの姿が浮かぶ。また事実を明らかにするためには、伝統主義者であるカルリスタの系譜に属する女性の存在も考慮する必要がある。その上で、口述史によるアプローチの可能性も含め、新たな資料を見出すことが私たちの今後の課題といえるだろう。

43) カトリックの権威が女性の身体に与える社会的・政治的影響力に関しては、以下の文献を参照されたい。Frances LANNON, “Los cuerpos de las mujeres y el cuerpo político católico: autoridades e identidades en conflicto en España durante las décadas de 1920 y 1930”, *Historia Social*, n.35, 1999, pp. 65-80.

本論稿は平成21年度科学研究費補助金「宗教と国家：スペインにおける戦争犠牲者の祈念をめぐる一考察（課題番号21510269）」による成果の一部である。